古代東アジアの庭園思想

Garden Thought in Ancient East Asia

仁藤敦史

NITO Atsushi

はじめに
❶庭園用語の字義
❷園林と都城
❸上林苑・華林園・唐三苑
❹百済・新羅・倭国の庭園
おわりに

【論文要旨】

本稿の目的は，古代中国の庭園思想およびその展開を考察し，百済・新羅および倭国への思想的影響を考察することである。

「園」は果樹（後には蔬菜を含む）の栽培地で，農園の意味が本義なのに対して，囲む垣がある「囿」から拡大発展した「苑」は，禽獣すなわち，動物を飼育する宮廷的施設と解釈される。都城制と園林との関係は，第一に南北朝期を境に，都城とは断絶した広大な外苑と，都城内に置かれた観賞的な内園へ分離する。以後，外苑は縮小して都城と密接化し内園と同質化していく。第二には都城の南北軸線上に園林が配置されて，太極宮の北に位置する禁苑として内園が確立する。

園林は，祥瑞的な動物を集めた観賞用あるいは帝国の広大な領域性を示すものとして発展した。秦の始皇帝も前漢武帝も楼閣を造営して仙人を呼び寄せ長生不老の仙薬を求めようとした。池と山を中心とする洛陽の華林園を継承する意識は，南朝にも強かったが，築山の周辺に楼観・堂閣を配置する形式に変化した。南朝では，小池を海，石を山に見立てる抽象化が進行した。

再び大規模な園林が長安と洛陽に再興されるのは統一王朝となった隋唐期となる。隋唐の園林は，統一国家の性格を反映し，明らかに秦漢以来の上林苑と北朝および南朝の諸要素を融合させた。

百済・新羅および倭国は，成立期の庭園文化として中国南朝的な庭園文化を取り入れたことが想定された。東アジア諸国における都城の成立とも密接な関係を有する思想の導入といえる。

【キーワード】庭園，都城，東アジア，上林苑